

✠ エルサレム巡礼日本人第一号「ペトロ・カスイ岐部神父」とは ✠

徳川政権下、それも家康存命中、ただ一人でエルサレムに入った岐部神父とはどんな人物だったのか。私はキリシタン関連遺跡を訪ね歩くうち岐部神父の数奇な人生経歴を知って興味を抱き、今年ようやく彼の出生地と殉教地を訪問することが出来た。彼は 1587 年、今の大分県国東市国見町岐部で生まれた。1587 年といえは秀吉が朝鮮征伐で福岡県の名護屋城に滞在、キリスト教禁制を発した年である。父親はキリシタン大名大友宗麟の重臣で国東半島北部の領主、母は宇佐八幡宮の神官の娘だが両親ともイエズス会派(フランシスコ・ザビエルらが創立)のキリシタンであった。彼も生まれてすぐ受洗、洗礼名ペトロ(ペテロ)を名乗る。ところが大分府内城主の大友氏が滅亡、岐部一家は長崎の宣教師、あるいはキリシタン大名で熊本宇土城主の小西行長を頼ってかたにかく長崎に避難した。しかし長崎の暮らしは(資料なく)不明である。帰農それとも商売して暮らしたのか、それとも武士として極小の禄でも食んでいたのか。ともかくペトロは 13 才にしてカトリックの司祭となる夢を抱き長崎のコレジオ(神学校)に入学して神学の勉強を志した。その後キリシタン大名だった島原の城主・有馬晴信(家康家臣の岡本大八に失地回復を依頼して賄賂を贈ったことが露見し斬首された)が島原に新しくコレジオを創設したのでそちらに移る。彼は非常に秀才だったらしく、若くして神学とラテン語に通じたという。卒業後、福岡県の秋月などで司祭の助手として働いていた。

秀吉の死後、家康は秀吉のキリシタン禁制を骨抜きにしていたが、1612 年岡本大八事件をきっかけに幕府は再びキリシタン禁制に踏み切った。かつ幕府のアドバイザーだった学僧・金地院崇伝らの意見(豊臣方の西国大名らが宣教師を通じて西洋の新型武器の輸入や交易による蓄財をこのまま放置するとやがて徳川の脅威になるとの意見)もあって日本から宣教師を国外追放すべしということになり、1614 年幕府は宣教師らの国外退去を命じた。一方、各藩には外国との通商禁止、外国との正式窓口は幕府管轄の長崎出島のオランダ商館のみとなる。宣教師らの国外退去令によりポルトガル、スペインからの宣教師たちは長崎に集められ(隠れた宣教師もいる)、船を仕立ててフィリピンやマカオあるいはインドのゴアに向けて日本を去った。その中にはペトロ岐部ほか多くのキリシタンも乗船、難を逃れた。加賀前田藩に食客となっていた高山右近一家もその時マニラに追放された。

ペトロらはマニラ経由で中国マカオのイエズス会修道院に保護された。ザビエルが病死した所である。ところが教区長や幹部らは日本人難民を快く思わず、司祭になることを目指して神学を勉強しようとしていたペトロはこれに失望、二人の日本人神学生と図り、ここを去ってローマに行きローマで夢を果たそうと脱走を決意した。彼らがどのようにして船に乗りマラッカを経由してインドのゴアまで行ったのか資料もなく分からないらしい。とにかくイエズス会のアジアの拠点だったゴアにしばらく滞在、そこで彼は二人の神学生と別れ単独で船に乗り、ア

ラビヤ海からペルシャ湾に入りクエートに上陸している。この航路から考えて彼はイエズス会の援助を受けていないことは確かである。普通宣教師らが利用するポルトガル船ならアフリカの喜望峰(ケープタウン)回りであった。ペトロの足跡については詳しい記録がないためよくわからないが、私はおそらく中国の商船に便乗し、明が開拓した交易ルートを選んだのではないだろうか?と思う。一方残されている資料によれば、マカオの司教区からゴアやローマに「彼らが脱走したこと、そのような流浪人が立ち寄っても相手にするな」との手紙が発送されていた由である。そんなことからイエズス会の支援を得てポルトガル船などには簡単には乗れなかっただろう。それで中国かインドあたりの船に乗り、おそらく水夫か雑用掛りとして乗せてもらったものであろうか。

クエートからはイラクを経て陸路でエルサレムに行ったとされる。そして多分駱駝の隊商に雇われて砂漠を旅したと推測されている。しかし私は彼がやむえずこの陸路ルートを選択したのではなく、ゴアを出るときからエルサレム巡礼を考え、あえて陸路を選択したと思っている。

さて彼がエルサレムを巡礼したことは彼がローマで語った記録などから事実とされるが、どんな印象を受けたかなどはよくわからないらしい。とにかく徳川時代を通してイエスやその弟子たちが活動したエルサレムを訪問した日本人は彼一人である。巡礼後彼は地中海を船でイタリアに渡り、1620年ベネチアに上陸し、ローマに至りイエズス会本部を訪ねた。幸いローマには日本にいた宣教師から「ペトロ・カスイキベをよろしく」との紹介状がすでに届いており、しかも彼が流暢なラテン語で挨拶したこともあってマカオと異なり好印象でイエズス会本部に暖かく迎え入れられた。勿論ローマではすでに大友宗麟らが派遣した少年遣欧使節のことはよく知られており、日本人キリシタンの評価は極めて高かった。また日本におけるキリシタン迫害のことなども日本在住の宣教師らの報告でよく理解されていた。早速その年の9月23日ローマ教区の適性確認尋問試験で助祭に認定され、さらに10月21日の日曜日、ローマ・ラテラノ教会ではれて神父に叙階(階級認定)された。極めて異例なスピード出世であった。これも日本ですでにラテン語と神学を極めていた証拠である。彼はローマの教会で司祭としての修練の傍らグレゴリアン大学でさらに研鑽を積んだ。しかし彼はローマに長く留まることを良しとせず、2年後(1622年)ローマ教区長に帰国を願い出た。彼の心はあくまで祖国日本にキリストの愛を伝え、平和と人々の心に癒しをあたえるために死をもいとわない覚悟を秘めていたからである。キリシタンを排除するような日本に今帰国することは危険と押しとどめる周囲の声もあったと思われるが、決意は固く許可を得てローマを後にリスボンに向かった。リスボンのコレジオでインド艦隊の入港を待って、1623年2月、アフリカやインドに向かう宣教師たちとともにアフリカ回りの船に乗船した。しかし船旅は順調ではなかった。幾度も船は難破してアフリカの密林を彷徨い、船を乗り換え、モザンビークで風待ちして、1624年4

月ゴアに到着。ゴアに滞在して1627年正月ゴアを出港、ところがマラッカ海峡でオランダ船の攻撃を受け、這う這うの体でマラッカに逃げ込み命拾いした。着いて草々マラリヤにかかり、多分養生もかねてタイのアユタヤに行き日本人町で約2年間滞在しながら出港の機会を待った。その間身分を隠して水夫として働いた。おそらく次の船賃を稼ぐためであろう。1629年5月運よくマニラ行きのスペイン船がアユタヤに入港し、それを捕まえてマニラに向かった。

マニラではイエズス会のコレジオでしばらくお世話になり帰国の機会を待った。マニラでは国外に逃れた旧知のキリシタンも多く、彼らの援助もあって古船を入手、水夫を雇い、やはり密かに日本行きを窺っていたミゲル松田神父らとまずルパン島に出てそこから鹿児島を目指した(1630年3月)。ところが鹿児島を目前にしてトカラ列島付近で嵐に会い座礁、島民から小舟をチャーターして坊ノ津に上陸した。43才、16年ぶりの祖国であったが勿論日本は鎖国中、しかもキリシタン禁制、見つければ即刻打ち首。どうやって長崎までたどり着いたのだろうか。

ペトロ岐部神父の帰途についてはローマ認定の神父として乗船していたため、寄港地から達筆なラテン語でローマに報告書を送っており、今でも大切に保管されていて、マニラ出港まではかなり詳しく様子がわかっている。しかしそれ以後の彼の行動については日本で隠れて宣教活動していた宣教師や日本人伝道師らのごく僅かな記録しかない。当てにしていた長崎もキリシタンの詮議が厳しいと聞き、逗留は危険と判断した彼は取り締まりがまだ比較的ゆるやかと聞いた仙台に向かうことにした。一緒に行動していた松田神父は山中で死亡した。しかし仙台藩もキリシタンに寛大だった伊達正宗が死去し、二代目藩主は幕府に呼び出されてキリシタンの詮議を厳しくするよう圧力をかけられていた。仙台にいた多くのキリシタンも北の南部藩や北海道まで逃げ隠れたことを知った彼は石巻から北上川を遡り、キリシタン領主の後藤寿庵を頼って水沢(今は岩手県)に行くことにした。しかし水沢に到着したときはすでに後藤寿庵も姿を隠して行方不明、とりあえず三宅藤右衛門の屋敷にかくまわれて北上川周辺に隠れたキリシタンを探して励ましながら宣教活動を続けた。しかしついに密告され、仙台にまだいた宣教師らとともに捉えられ、徒歩で江戸まで連行された。

江戸では幕府の伝馬町牢屋に入れられ、そこには多くのキリシタンも居たという。その牢があった場所は今の小伝馬町駅近くの十思公園の一带といわれている。公園に幕末、吉田松陰らもその牢に入れられていたという碑がたっている。キリシタン達は日々の厳しい拷問で棄教したり、失神して死去した者が多い中、ペトロ岐部神父はそれに耐え頑として転ぶことはしなかった。将軍家光も直々尋問するという異例なこともあった。その結果ついに(穴を掘って逆さに吊る)穴吊りの極刑となった。頭に血が逆流、獄吏が頭の一部を切って血を抜いたという。それでも死ななかつたため、腹に焼けた鉄棒か火のついた薪を押し当てたため、腹が裂けて腸が飛び出したと記録されている。1639年7月4日没。享年52才。処刑場

所は徳川時代の死刑囚処刑場のあった浅草鳥越近辺とされている。今、カトリック浅草教会の裏に殉教キリシタン達の記念碑が立つ。彼が拷問に耐え棄教しなかったのは武士の子として良い意味での武士道精神に支えられたのかもしれない。

以上、ペトロ岐部神父の生涯をざっとたどったが、2007年2月、ローマ法王庁枢機卿会議がペトロ岐部以下187名の殉教者の福者認定を答申、6月2日決定され、翌年11月長崎で列福式が挙行された。私は今年7月、上京の折、小伝馬町の牢屋跡と浅草鳥越の殉教記念碑を訪れた。そして9月末台風24号が迫る直前の29日大分国東半島のペトロ岐部神父記念公園を訪ねた。なにしろ交通不便な所でもあり、国東の地理に明るい大分大の友人T君に雨の降る中車で案内してもらった。T君に厚くお礼申し上げる。前日私は大阪を発ち、豊後竹田市に直行、キリシタン研究所を訪ねて所長から竹田のキリシタンの遺物などを見せていただき説明していただいた。実は私の住む茨木市と竹田市は姉妹都市で、それはキリシタン大名だった茨木城主・中川氏が竹田城主として移封した縁からだが、その前の城主志賀氏の時代からすでにキリシタン王国で、それで関連遺跡や遺物が多く残っている。遺物の目玉は中でもキリストの使徒のヤコブではないかと言われている頭部石像ともう一つはサンチャゴの鐘と呼ばれている吊鐘である(サンチャゴはヤコブのこと)。実物は重文で見られないが展示品は成分分析から実物そっくりに複製されたもので、鳴らしてみると澄んだきれいな音がした。その日は日本一高濃度の炭酸泉として昔宣教師らも愛用した長湯温泉(直入のラムネ温泉)に宿泊した。宿に入る前、温泉から数キロはなれた田園にある有名な「原のキリシタン墓碑」を見に行った。誰の墓碑か不明だが INRI (ユダヤの王ナザレムイエス)の文字が彫りこまれた貴重な墓碑である。長湯はこれで2度目だが評判どおり泉質は極上である。



左端:カトリック浅草教会裏にあるキリシタン殉教記念碑

左中:ペトロ・カスイ岐部神父像
国東市ペトロ岐部記念公園

右端:サンチャゴの鐘。IHSの紋章と HOSPITAL SANTIAGO, 1612 と陽刻されている。長崎の聖ヤコブ病院で鑄造されたものか?



右下:キリストの弟子ヤコブの石像ではないかといわれている。地中海沿岸の石で13世紀頃製作されたらしい舶来品。竹田城の城壁の下の草むらに転がっていた

左下:直入の「原のキリシタン墓碑」 十字の

上部が欠損するが墓碑に INRI の刻印があるのは全国でこれのみ

